

短期語学研修に参加する日本人学生の不安の理解

—特性不安と外国語不安—

奥村 玲 香

はじめに

帝塚山大学では、春期休暇中の毎年2月に約4週間の短期語学研修をニュージーランド、クライストチャーチにあるChristchurch Polytechnic Institute of Technology (CPIT)にて実施している。2009年は、2月13日から3月15日までの31日間で、4学部から8名の学生（男子2名、女子6名）が参加した。

学生は、初日に英語のクラス分けテストを受け、その後4週間、毎日約3時間の英語の授業を受ける。午後は、観光などを含む体験学習を中心としたアクティビティに参加する。研修中、学生は、全員ホストファミリーと生活を共にし、午後や週末を過ごすこととなる。

学生にとって、海外における語学研修は、日本での日常生活とは全く異なり、当然のことながら不安が大きい。母国語が通じない環境での生活や新しい文化との接触、日本語が使えない英語の授業など、不安と緊張の場面の連続である。また、自分の英語力に対する自信のなさからくる不安だけではなく、所属学部や学年の違う学生達との集団生活や対人関係など、言語や文化以外にも、多くの不安や緊張を感じている。

本研究では、1) 語学研修に参加する学生はどのような不安を持っているのか、2) 外国語学習に特有の不安の軽減に、語学研修は効果的であるのか、3) 研修期間の前後で、学生の不安に変化はみられるのか、の3つの点について考察を行う。語学研修への参加や英語学習に関する学生の様々な不安を事前に理解し、それらを解消するためのオリエンテーションの実施など、短期語学研修の効果を最大限に引き出すための具体的な方法を考える。

外国語学習不安の理解

情意フィルター (Affective Filter)

学習者の情緒的な状態が、学習効果に与える影響は大きい。人間の脳には、言語を学習する過程において、フィルターのような働きをするものがある。もしそのフィルターが開いている場合、言語の習得（インプット）が行われ、閉じている場合には、どれだけ学習をしても言語

習得は行われない (Burt, Dulay & Krachen, 1984)。学習者がその言語に対して興味を持っているか、また、その言語を何らかの形で自分のものにしたい、役に立てたいと意欲的に学習している場合、情意フィルターは開いており、言語の習得が行われる。一方、学んでいる言語やその文化に興味がない場合やその言語を習得する必要性を感じていない場合には、学習者の情意フィルターは閉じていて、言語の習得は起こらない。

語学研修に参加する学生は、英語という言語に興味を持ち、その言語が使われる文化や生活について興味を持っていることは言うまでもない。しかし、十分な興味、関心を持ち、自ら語学研修に参加する意思決定をして臨んでいる場合でも、情意フィルターを閉ざしてしまうものがある。学習における「不安」である。

語学研修に参加する学生に限らず、学生の多くは、外国語の学習や授業に対する不安を持っているといえるが、海外における語学研修では、特にその不安が大きい。英語で書かれた教材を使い、授業も英語で進められるため、英語による直接教授に対する不安を訴える学生が多い。そういった不安が、外国語によるインプットのプロセスにおいて何らかのフィルターをかけてしまい、その結果、外国語のメッセージを取り込むことを妨げてしまうのである。不安は認知活動を妨害し、学習を妨げる原因となるのである。

GardnerとMacIntyre (1992) は、言語習得に関わる要因を情意面と認知面の2つに分けて考えている。態度 (attitude)、動機 (motivation)、言語不安 (language anxiety)、自信 (self-confidence) などを含む「情意面」と、知能 (intelligence)、言語適性 (aptitude)、ストラテジー (learning strategy) を含む「認知面」の二つである。本研究では、「情意面」のひとつである「言語不安」に焦点を当てて考える。

不安の種類

外国語を学ぶ者にとって、不安 (anxiety) というのは様々なかたちで表われる。不安は大きく2つに分けられる (MacIntyre & Gardner, 1991)。ひとつは、習性不安 (trait anxiety) で、もうひとつは、状態不安 (state anxiety) である。また、Ellis (1994) は、第二言語学習に関する不安をtrait anxietyとstate anxiety、そして、2つの相互作用によって起こるsituation-specific anxietyに分類している。

習性不安とは、状況に関係なく、不安になりがちであるという個人の特性によるもので、人の認知機能に影響を与え、場合によっては、状況判断ができなくなったり、回避的な行動を起こし、パニックになったりすることもある。一般的に、多くの人々にとって不安を感じさせる状況が、ある人にとっては必ずしもそうではなく、時に気持ちが和らぐ状況であるなど、個人によって状況は異なる。

状態不安とは、不安を喚起する状況における一過性の不安で、変化するものである。教室における言語学習の例を挙げると、テスト前になると落ち着かなくなったり、発表の際に、緊張

のあまり記憶が途切れたりするのがその例である。

本研究では、日本語版State Trait Anxiety Inventory (STAI) を使用して、語学研修に参加するという特殊な状況における学生の不安、すなわち、状態不安の変化を測定する。

外国語不安

外国語不安は、第二言語習得に特異で、明確な過程である (Horwitz et al., 1986)。外国語不安 (foreign language anxiety) に関して様々な研究がなされているが、一貫していえることは、不安は言語学習を妨げる要因となっているということである。外国語学習に関する不安は、子供よりも、大人の方が大きいといわれており、学習がより正式なものになればなるほど、友人や知人から学ぶのと比べ、不安は大きくなる (MacIntyre, Noels, & Clement, 1997)。言語使用不安やコミュニケーション不安は、外国語学習の習得に大きく影響するものである (八島, 2003)。言語習得の過程において重要な役割を果たす不安をいかに克服し、学習をスムーズにすすめるか、が課題であると考ええる。

大人数の前で間違えることへの恐怖や緊張、しゃべれないことへのストレスや日本語なら話せるのにという苛立ちなど、第二言語を使用するときを感じる不安は、学習者の性格や第二言語の能力によって異なるが、こういった様々な不安が外国語の習得に与える影響は大きい。学習者の不安度が高いと上手く言語を習得できなくなり、能力の認知にも影響を及ぼすといわれている (Clement et al. 1997)。不安を抱いた学習者や言語学習の過程で否定的な経験をした者は、第二言語 (英語) 学習を不快なものとして捉えてしまい、学習することを拒否してしまうのである (MacIntyre & Gardner, 1991)。

これまで多くの研究者が、外国語学習が不安感を引き起こす可能性について研究を行っているが、外国語に対する不安要素として、Horwitz と Young (1991) は以下の 3 つをあげている。

コミュニケーションに対する不安 (communication apprehension)

人と話をするときに、理解できないことがあるのではないかと不安に駆られる。困難さを感じることに對しての不安のことで、外国語でのコミュニケーションや自分の知らない分野におけるコミュニケーションに特有の不安であるといえる。この種の不安が、語学研修に参加する学生が持つ不安の中で一番大きな不安であると考えられる。教師や現地のスタッフ、研修中に滞在するホストファミリーとの会話など、「ちゃんと理解できなかったらどうしよう…」というコミュニケーションに対する不安を訴える学生が多い。

テストに対する不安 (test anxiety)

テストできちんとできなかったら、点数が悪かったら、どうなるのだろう等、失敗するこ

とを恐れる気持ちから生じる不安である (Gorden & Sarason1955; Sarason1980)。オーラルテストの場合は、テストに対する不安とコミュニケーションに対する不安の両方を同時に引き起こすことがある (Horwits & Young, 1991)。語学研修では、授業開始前にクラス分けテストが行われる。「テストでまったく分からなかったらどうしよう」など、テストに対する不安はもちろん、「せっかく語学研修に参加したのに、授業についていけなくて単位をもらえなかったらどうしよう…」という不安を持つ学生が多い。

否定的評価への恐れ (fear of negative evaluation)

他の人が自分をどう思うのかというまわりの評価に対する恐れ、悪いイメージを持たれているのではないかと、自分は頭が悪いと思われているのではないかと、という否定的な評価をされることへの心配や不安である (Watson & Friend, 1969)。語学研修中、周囲の目を気にして言いたいことがあるけど言えない、教師やクラスメイトに「あの子の英語は理解できない」と思われているのではないかと、「この子、本当に分かっているのかしら？」と思われているのではないかなど、自分の英語力に対する周りの評価を気にする学生が多い。第一言語（日本語）を話す自分と第二言語を話す自分の違いから、英語でコミュニケーションをとる自分が何もできなく無力であると考えてしまう傾向がある。

本研究では、Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS) を用いて、外国語学習における不安の変化を測定する。

方 法

<目的>

語学研修における参加学生の不安の状況と外国語学習に特有な不安を理解するために、2種類の質問紙をもとに測定結果を分析した。学生が語学研修に参加する際に感じる様々な不安の状態を把握し、語学研修に関わる大学の教職員が、学生の不安を少しでも軽減できるような参加募集の方法とオリエンテーションの実施、よりよい異文化体験の海外語学研修プログラムの実現を目指すことを目的とした。

<対象>

2009年2月13日から3月15日までの31日間、ニュージーランド、クライストチャーチの Christchurch Polytechnic Institute of Technology (CPIT) に於ける語学研修に参加した4学部8名の学生（男子2名、女子6名）を対象に行った。

<調査方法>

State Trait Anxiety Inventory (STAI)

不安傾向を測定するために日本語版State Trait Anxiety Inventory (STAI) を使用した。STAIは、状態不安と特性不安を測定するための尺度で、それぞれ20の査定叙述文からなり、尺度は「全く当てはまらない (1点)」「非常によく当てはまる (4点)」の4段階の評定で得点化される。状態不安尺度は、回答者が「今まさに、どのように感じているか」を評価し、特性不安尺度は、回答者が「ふだん一般にどのように感じているか」を査定している。プロフィールは、段階得点とパーセンタイルで表される。

Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS)

外国語学習不安の測定には、Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS) に、3つの項目を付け加えた質問紙を使用した (Goshi, 2005)。FLCASは、外国語学習環境における不安を測定する尺度で、33の査定叙述文からなる。通常、尺度は5段階のリカートスケールを用いるが、中間値である3を避けるため、「全くそう思わない (1点)」から「非常にそう思う (6点)」の6件法を使用することにした。(質問項目は付表1を参照)。

振り返りノート

参加学生8名に、研修期間中に毎日「嬉しかったこと」「がっかりしたこと」「疑問に思ったこと」「学んだこと」「驚いたこと」「明日、私がしたいこと」の5点と新しく出会った英単語や英語表現を自由記述でメモをしてもらうようにした。

<実施日>

語学研修開始直後と語学研修終了後の計2回、実施した。第1回目は、語学研修へ出発する当日の2月13日、飛行機の出発待ちのロビーにて行われ、第2回目は、語学研修終了後、約2週が過ぎた3月30日、写真交換会を兼ねた報告会にて行われた。

調査結果は、学生の語学研修の成績評価には一切関係がない旨を伝え、同意書にサインの上、2種類の質問紙を配布した。名前、実施日などを記入した後、各質問項目をよく読み、自分にもっともよく当てはまると思う番号を選ぶように指示した。

結 果

<FLCASの結果>

今回調査に用いた36項目のうち、3項目 (10, 20, 26) は、オリジナルのFLCASとはことなる追加項目であったため、分析からは削除した。また、取得したデータのうち、以下の項目

(2, 5, 8, 11, 14, 18, 22, 28, 32) は、逆転項目として扱った。

通常の 5 件法では、99未満の場合を外国語学習不安が低いと考え、99以上の場合を不安が高いと考えるが、今回の調査では 6 件法を使用したため、124未満を低不安群と考える。

以下の図 1 は、参加学生 8 名の FLCAS の変化を示したものである。事前テストでは、124 を超える高い外国語学習不安を持つ学生が 3 名いたが、事後のテストでは、学生 E の 1 名だけになった。

8 名の学生のうち 6 名の学生は、事前と事後のテストで不安が減少する結果となっている。反対に、学生 A は、86 から 107 へ不安を上げ、同じく学生 B も、変化は小さかったとはいえ、不安を上げる結果となった。8 名の学生の外国語学習不安は、平均して 16.25 減少する結果となった。

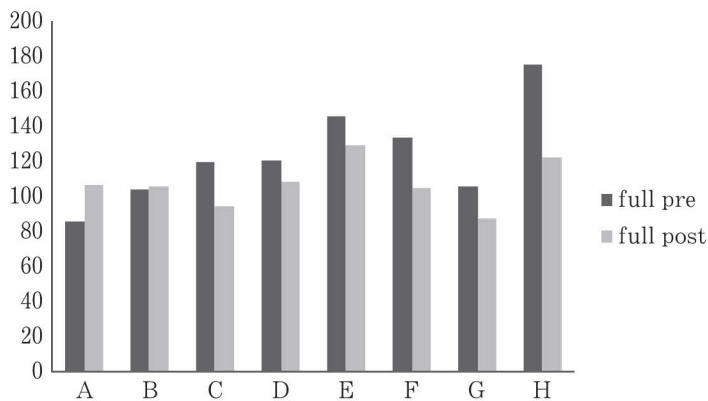


図 1 FLCAS の得点変化

FLCAS の 33 項目の中から、事前テストで不安度の高かった 5 項目を選出し、事前と事後のテストにおける不安度の変化をみた。事前テストで不安度の高かった項目は、表 1 のとおりである。

表 1 不安度の高い 5 項目

問 7. 自分よりも他の学生のほうが英語ができるのではないかと思ってしまう
問 8. 英語のテストの時はいつも緊張しない
問 19. 英語の授業で話すとき、自信がある
問 25. 他の学生は自分よりも英語をうまく話せるといつも感じてしまう
問 27. 他の学生の前で英語を話すことにとても自信がある

不安度の高かった 5 つの項目の不安度の変化は、図 2 に示したとおりである。問 8 「英語のテストの時はいつも緊張しない」が 4.75 から 3.375 に変化した以外、残りの 4 項目にはあまり大きな変化は見られなかった。

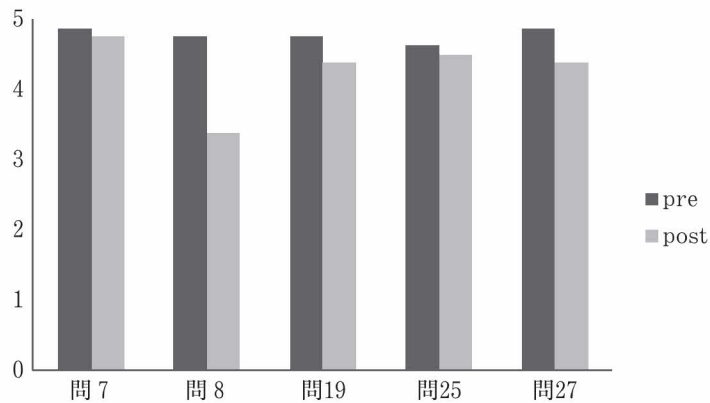


図2 不安度の高い項目

次に、不安の変化度の変化率の高かった項目を5つ選出した。選んだ5項目は、表2のとおりである。

表2 不安度の変化率の高い5項目

問2. 英語の授業で間違えることを恐れていない
問5. もっと英語の授業を履修してもいいと思う
問8. 英語のテストの時はいつも緊張しない
問24. 英語の授業で話をしている時、緊張して混乱してくる
問30. 英語の授業のためにしっかり準備（予習）をしないといけないというプレッシャーを感じない

以下の図3は、不安度の変化率の高かった5項目の事前と事後の変化を示したものである。1番大きな変化を示したのは、問5「もっと英語の授業を履修してもいいと思う」で1.875の変化があった。次に大きな変化があったのは、問2「英語の授業で間違えることを恐れていない」で1.5の変化があった。問8「英語のテストの時はいつも緊張しない」では1.375、問24「英語の授業で話をしている時、緊張して混乱してくる」と、問30「英語の授業のためにしっかり準備（予習）をしないといけないというプレッシャーを感じない」は、どちらも1.25の変化が表れた。

短期語学研修に参加する日本人学生の不安の理解

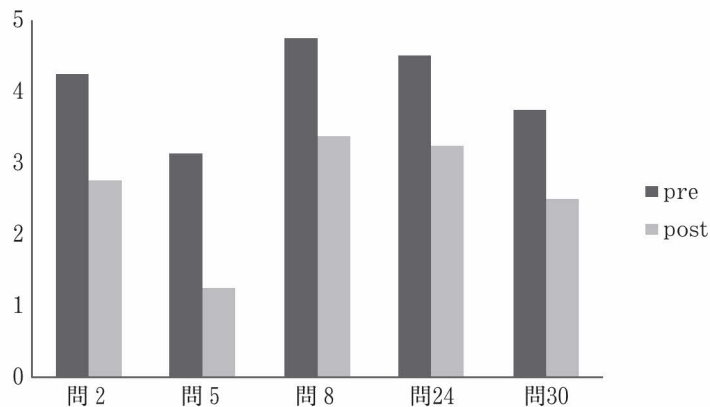


図3 不安度の変化率の高い5項目

事前と事後のテストで、まったく不安度に変化のなかった項目が3項目あった。項目は以下の表3のとおりである。問1は3.75、問13は2.88、問19は3のまま、事前と事後のテストで変化が表れなかった。

表3 不安度の変化のなかった3項目

問1. 英語で話をしている時、自分自身についてあまり確かだと感じない
問13. 英語の授業で、緊張し過ぎて自分の知っていることを忘れてしまうことがある。
問19. 英語の授業で話すとき、自信がある。

次の表4は、事前と事後のテストで、不安度が上昇している2項目である。問4と問6では、3.25から3.75へ不安度が上がる結果となった。

表4 不安度が上昇した2項目

問4. 先生が英語で言っていることが分からないと心配になる。
問6. 英語の授業中、授業内容と関係のないことを考えていることがある。

<STAIの結果>

特性不安と状態不安の2つの不安の測定を行ったが、今回の研究では、語学研修という特殊な環境における不安を測定するため、状態不安のみを取り上げることにした。図4は、8名の学生の状態不安の変化を示したものである。

8名中7名の学生に、全員が研修前と後で状態不安に大きな変化が見られた。もっとも状態不安の変化率の高かった学生Eは70%から10%へ、続いて学生Hも55%から4%へ大きな変化をみせた。8名の学生の状態不安は、事前と事後で平均すると約35%から7%へ減少している。

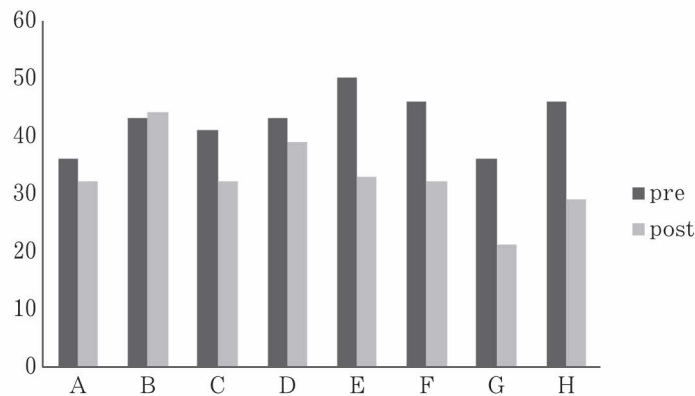


図4 状態不安の変化

<振り返りノート>

8名の学生の中には、出発の日から毎日欠かさず丁寧に記録を続ける者、途中、記録に疲れ、数日の記録が抜けている者、また、毎日の振り返りの内容が深すぎて提出をためらう者など様々であった。提出については、学生個人の意思に任せた上で、最終的に提出された5名の学年の「振り返りノート」に記されたコメントを集め、それらのコメントを「友達づくりと人間関係」「英語力とコミュニケーション」「英語」「自己理解」「外国文化と日常生活の疑問」の5つに分類した。以下の表5は、「振り返りノート」の学生のコメントを抜粋したものである。

1日の出来事や気持ちの変化をメモとして残し、自分自身が感じたさまざまな思いを自身にフィードバックするという振り返りの記録には、学生の成長、変化のあとがみられる。英語が通じないもどかしさを感じ、自分の英語力のなさに落ち込む。諦めずに努力を重ね、思いが伝わり、コミュニケーションがとれる喜びを味わう。そして、再び壁にぶつかり、苛立ちを感じ、時には、周りの学生と自分を比べ、自分だけができていないのではないかと、不安になったり、焦りを感じたりを繰り返している。また、授業や日常の体験や観察の中では、多くの疑問を抱きながら、それがまた新しい発見につながっているようであった。

今までに味わったことのない自分自身の感情や素の自分に出会い、学生達は、喜びや悲しみ、不安や緊張といった自分の感情をコントロールする方法を見つけ、新しい自分を発見することや自己を受け入れることを学んでいる。不安や緊張、焦りや苛立ちは心地のよいものではないが、そういった感情は当然のものであるということ、必ずしもマイナスの要素ではないことを知り、積極的に取り組もうとする努力の過程がみられた。

表5 参加学生のコメント（振り返りノートより抜粋）

友達づくり・人間関係	<ul style="list-style-type: none"> ● 1人で参加したこのNZ短期語学研修で1ヶ月留学生活をともにする人達と早速仲良くなれたこと。 ● 学年も、学部もちがって全然知らない人ばかりの対面だったけど、みんなと仲良くなれた気がした。 ● 夜、みんなで写真をとった。やっとなじめた気が…（笑）。 ● もっと他大学の人達や帝塚山の友達とも仲を深めていけたらいいと思うので、そのように過ごしたい。
英語力とコミュニケーション（＋）	<ul style="list-style-type: none"> ● 多分いっぱい間違っている所はあるのだろうけど、あまり考えずに会話のキャッチボールが出来るようになってきた。 ● 今日から英語の授業が始まって、他国の人ともジェスチャーを使いながら、お互いごちない英語でしゃべってたけど、一生懸命したら理解してくれようとするのを学んだ。 ● ちゃんと言ったら伝わる。正しく言えてなくても伝えようと頑張ったら理解しようとしてくれる。 ● とりあえず口に出す！
英語力とコミュニケーション（－）	<ul style="list-style-type: none"> ● 英語のできなさにながかり。Listeningは全く出来ないし、単語も基本的な言葉もでてこない。自分自身が嫌になった。 ● みんな英語むっちゃしゃべれるようになってるけど、自分だけ成長できてない気がする…。あと残りわずか頑張る。 ● 英語がいっこうにしゃべれない…当たり前か…たぶんリスニングはましになったかも…でも、不意にしゃべられると、だめ…。聞く気になってないとだめ…よく分かりません。 ● クラスの中で授業が1人だけがわかっていない気がして、もっと勉強しないとダメやって思った。 ● 授業で、周りの人達はほぼ英語のspeakingが出来ているし、理解できるのですが、自分はそういったことができず、落ち込みそうになった。この悔しさをバネに、次にステップアップしたい。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ● 知ってる単語もKiwi（ニュージーランド人）のPronunciationだと聞き取れない。 ● ホストマザーがアメリカ英語・イギリス英語・NZ英語の違いを教えてくれた。 ● こっちはcentre。 ● Lateの発音がrightに聞こえる。
自己理解	<ul style="list-style-type: none"> ● 今日は精神的にダメダメな1日やった。自分の弱さにながかり。 ● 人に頼ってばかりじゃなくて、自分自身がしっかりしないといけないとわかった。泣きたい時は泣いて、次からがんばればいい。 ● 自分の意志を伝えることは大切。 ● 自分自身、強くならないと！！悩んでたって仕方がない。明日になればまた変わるはず。
外国文化・日常生活の疑問	<ul style="list-style-type: none"> ● こっちのBBQって…？なんかハンバーガーを食べた感じやった。日本のBBQを教えてあげたい。 ● Hokey-pokeyのかたまりを食べたけど、Hokey-pokeyって何？ ● バスの中でひもみたいなのがあった。それを引っ張ったら、ボタンを押してることと同じなのか？ ● クリケットってどんなスポーツ？

考 察

今回の語学研修の参加学生は、8名と少なかったため、調査結果の統計的な検討を行うには至らなかったが、学生が持つ語学研修に関する不安の種類や外国語学習に関する不安が、明ら

かになった。学生の持つ不安を考慮に入れた、研修前、中、後のオリエンテーションの実施が学生の不安の解消につながると考える。

東生駒と学園前の2つのキャンパス、6学部10学科に所属する参加学生が、全員で集まれる日程で事前のオリエンテーションを実施することはなかなか困難であり、今以上の回数を行うことは難しい。しかし、限られた時間と回数で行われるオリエンテーションを、出発前の単なる旅の準備で終わらせるのではもったいない。さらに充実したオリエンテーションを行うためには、その内容について再度検討する必要がある。

まず、4週間、海外で共に学び、生活を共にする新しい仲間との関係づくりに不安を抱く学生が多いという事実を知り、そういった学生を考慮に入れた事前オリエンテーションの実施が必須である。1人で研修に参加することに不安を抱く学生は毎年少なくない。初回のオリエンテーションでは、多少の時間を費やしてでも、アイスブレイクのアクティビティを積極的に取り入れ、学生達に新しい環境で苦楽を共にする仲間がいることを知る機会を与える必要があると考える。

また、所属学部や学年が異なる学生達の大学における英語の学習時間にはかなりの差がある。それにともない、学生の基礎的な英語力だけではなく、文化や異文化コミュニケーションについての知識にも差があると考えられる。オリエンテーションでは、授業で頻繁に使われる英語表現やホストファミリーとの英会話といった言語的な知識だけではなく、研修先の基本的な情報などを含めた文化的な知識を増やすことも重要である。言語と文化の両方の知識をもつことで、現地でのスムーズな生活のスタートと研修に参加する学生の英語やコミュニケーション、日常生活への不安の軽減につながる。両方を合わせて、初めて、新しい文化や生活における「違い」を楽しむ余裕が持てるようになるのである。

さらに、オリエンテーションでは外国語は短期間でいきなり上達するものではないということ、言語を学ぶにあたって、不安や緊張を感じることは当たり前のことであるということ、カルチャーショックも誰もが経験する当たり前のことであること、などをあらためて認識する機会を与えることが重要である。

学生の中には、授業やアクティビティの合間に「振り返りノート」に書くような様々な思いを引率教員や友達にぶつけて不安を解消する学生もいれば、人に言えず、「自分だけがこんな思いをしているのかもしれない…」と悩み、苦しむ学生もいる。振り返りノートを共有することは難しいが、自分1人で不安を抱え、悩むのではなく、思いを語ったり、聞いたりして、研修中の参加者が、それぞれの思いを共有する時間、シェアリングの時間を現地のオリエンテーションに取り入れることは、研修期間中の学生の不安軽減に大きな役割を果たすと考えられる。

外国語学習に特有の不安については、普段の授業における練習の積み重ねが大切であり、英語力の向上につながるだけでなく、外国語を学習する際に起こる不安の軽減にもつながる。大学における通常の外国語の授業においても、学生の動機や不安といった「情意面」と学習ス

タイトルや学習ストラテジーなどの「認知面」の両方を考慮にいれた英語教授を考える必要があるといえる。

今後の課題

STAIとFLCASの2種類の質問紙を使って学生の不安の変化を測定したが、出発時、帰国後の2回の調査では十分に変化をみることはできない。今後、参加申し込みの決定時や事前オリエンテーション、研修期間中の測定も含め、実施時期と回数についてさらなる検討を重ねる必要がある。また、研修終了後の外国語学習に対する不安の変化や学習意欲の向上についても興味深く、追跡調査を行うことも今後の語学研修の発展につながると考える。

おわりに

参加募集の説明会や事前オリエンテーションを含め、出発前の段階から引率教員として学生の不安や緊張を一番近くでみてきたが、出発前の不安な表情とは一転、帰国後の学生の笑顔と自信に満ちた表情が、研修の成果と学生の成長の証であると思う。「語学研修に参加してよかった」「あれから英語をしゃべるのが怖くなくなった」「もっと英語の授業を履修したいんだけど、どうすればいいのか」といった声も多く、様々な不安を乗り越えて得た自信から、語学研修終了後に外国語学習に積極的に取り組む学生が増えていると感じる。

海外での異文化体験や集団生活を通して、思ってもいなかった自分に出会い、戸惑う学生。1ヶ月の研修の中で、英語やコミュニケーション能力だけではなく、不安を越えて得たものは大きく、自分自身と向き合うことで、自己理解、自己発見へと結びついている。

「短期留学に参加をしてみたいけど不安なんです」そんな学生に、参加学生の生の声を届け、不安を乗り越えて参加した語学研修で得たものを共有する場を増やし、参加をためらう学生の不安を少しでも軽減するような説明会の実施を目指すことで、さらに多くの学生が語学研修に参加することを願う。

外国語を学習する学生の情意フィルターが閉じてしまわないよう、言語学習を妨げる原因のひとつである「不安」のさらなる研究を行うとともに、閉じてしまいがちな学生のフィルターを少しでも開け、さらに多くの学生が語学研修に参加をしたいと思えるような語学研修のあり方、オリエンテーションのあり方について考えていきたい。

参考文献

Burt, M., Dulay, H., & Krashen S. (1984). 牧野高吉(訳) 第二言語の習得 鷹書房弓プレス.

- Ellis, R. (1994). The Study of Second Language Acquisition. Oxford University Press.
- Gardner, R. C. & MacIntyre, P. D. (1992). A Student's Contributions to Second Language Learning. Part I : Cognitive Variables. *Language Teaching*, 25, 211-220.
- Gordon, E. M. & Sarason, S. B. (1955). The Relationship between Test Anxiety and other Anxieties. *Journal of Personality*, 23, 317-323.
- Goshi, M. (2005). Foreign Language Classroom Anxiety: How Should the Classroom Teacher Deal with it? *Journal of The School of Marine Science and Technology*, 3 (2) 61-66.
- Horwitz, M.B., Horwitz, E.K. & Cope, J.A. (1986). Foreign language classroom anxiety. *The Modern Language Journal*, 70 (2) , 125-132.
- Horwitz, E.K. & Young, D. J. (1991). Language Anxiety: from Theory and Research to Classroom Implications. Prentice-Hall.
- Krashen, S. D. (1981). Second Language Acquisition and Second Language Learning. Oxford : Pergamon.
- MacIntyre, P.D & Gardner, R. C. (1991). Methods and Results in the Study of Anxiety and Language Learning: A Review of the Literature, *Language Learning*, 41:1, 85-117.
- MacIntyre, P.D., Noels, K.A., & Clement, R. (1997). Biases in Self-ratings of Second Language Proficiency: The Role of Language Anxiety. *Language Learning*, 47, 265-287.
- Sarason, L.G. (ed.) (1980). Test Anxiety: Theory, Research and Applications. Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- Steinberg, F. S, & Horwitz, E. K. (1986). The Effect of Induced Anxiety on the Denotative and Interpretive Content of Second Language Speech", *TESOL Quarterly*, 20, 131-136.
- Watson, D. & Friend, R. (1969). Measurement of Social-Evaluative Anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457.
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・Spielberger, C.D. (2000). 新版STAI State-Trait Anxiety Inventory-Form JYZ、実務教育出版
- 八島智子 (2003). 第二言語コミュニケーションと情意要因「言語使用不安」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」についての考察. 外国語教育研究 第五号, 関西大学外国語研究機構

付表1 Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS) の質問項目

-
- 問1 英語で話をしている時、自分自身についてあまり確かだと感じない。
- 問2 英語の授業で間違えることを恐れていない。
- 問3 英語の授業で、当てられる（名前を呼ばれる）と思うと心配になる。
- 問4 先生が英語で言っていることが分からないと心配になる。
- 問5 もっと英語の授業を履修してもいいと思う。
- 問6 英語の授業中、授業内容と関係のないことを考えていることがある。
- 問7 自分よりも他の学生のほうが英語ができるのではないかと感じてしまう。
- 問8 英語のテストの時はいつも緊張しない。
- 問9 英語の授業で、準備なしにしゃべらされるとパニックになってしまう。
- 問10 もっと英語を上達させたい。
- 問11 英語の授業（の単位を）落とすのではないかと心配になる。
- 問12 どうして英語の授業に文句を言う人がいるのか理解できない。
- 問13 英語の授業で、緊張し過ぎて自分の知っていることを忘れてしまうことがある。
- 問14 英語の授業で、進んで答えを発表することは恥ずかしい。
- 問15 ネイティブスピーカーと英語で話することに、緊張しない。
- 問16 先生が訂正していることが理解できないと混乱してしまう。
- 問17 英語の授業の準備が十分にできていたとしても、まだ不安になる。
- 問18 英語の授業に行く気がよくなる。
- 問19 英語の授業で話すとき、自信がある。
- 問20 英語の勉強をすることは得意ではない。
- 問21 英語の先生が自分の間違いを全部直すのではないかと心配になる。
- 問22 英語の授業で当てられる（名前を呼ばれる）と思うと、心臓がドキドキするのを感じる。
- 問23 英語のテストのために勉強をすればするほど、混乱してくる。
- 問24 英語の授業のためにしっかり準備（予習）をしないといけないというプレッシャーを感じない。
- 問25 他の学生は自分よりも英語をうまく話せるといつも感じてしまう。
- 問26 英語を勉強するのは嫌いだ。
- 問27 他の学生の前で英語を話すことにとても自信がある。
- 問28 英語の授業がどんどん進んでいくので、取り残されてしまわないか心配になる。
- 問29 他の授業よりも英語の授業の方が、緊張したり、不安になったりする。
- 問30 英語の授業で話をしている時、緊張して混乱してくる。
- 問31 英語の授業に行く時、堂々としているし、リラックスしている。
- 問32 英語の先生が言うことのすべてを理解していないと不安になる。
- 問33 英語を話すことを学ぶために学ばなければいけない決まりがたくさんあることに困惑してしまう。
- 問34 英語で話をしているとき、他の学生が私のことを笑うのではないかと恐れてしまう。
- 問35 ネイティブスピーカーに囲まれていても、快適に感じるだろうと思う。
- 問36 事前に準備をしていない質問を英語の先生がすると緊張する。
-